

## 「里海」とは

竹峰誠一郎

### 1. はじめに

#### 1-1 近年注目を集める「里海」

- 沿岸域の環境保全に取り組む市民活動の場
  - ・高知県柏島 NPO 法人「黒潮実感センター」  
人と海が共存できる持続可能な「里海」づくり、「里海セミナー」の開催
- 漁業者による活動の場でも
  - ・千葉県木更津 NPO 法人「磐州里海の会」
  - ・静岡県浜松市「はまなこ里海の会」
  - ・『里海通信』（全漁連・環境・生態系保全チーム＝発行）
- マスコミ報道
  - ・『毎日新聞』社説（08年12月24日）  
「『里海』創生——海を身近にするチャンス」
  - ・NHK 「伊勢湾答志島——里海の四季」（07年2月ローカル放送→全国放送）
- Web 上でも
  - ・Google 検索「里海」の検索結果 約 171,000 件（09年3月現在）
  - ・Wikipedia にも登場
- 国が推進政策に位置づけ
  - ・水産庁『水産白書』（07年度）「『里海』の再生をめざして」
  - ・「海洋基本計画」（08年3月）「『里海』の考え方の具現化を図る」
  - ・環境省「里海創生事業」支援（08年度から）  
「里海 30 選」の選定（10年度から予定）
  - ・国土交通省「里浜づくり宣言」（03年）

→08年は「里海元年」（中島満 web 上「MANA しんぶん」）

#### 1-2 認知度が高まる反面……

- 言葉が独り歩き
  - ・「人によって認識が違ふ。……言葉が独り歩きした面もある」  
（尾川毅・環境省閉鎖性海域対策室、09年1月31「里海シンポ in 志摩」）
- 「里海」の氾濫（中島満 web 上「季刊『里海』通信」）
  - ・「『海』や『漁村』を、なぜ「里海」と表現したほうがよいのか」
- なぜに「里海」？（水産政策審議会第20回企画部会、07年11月）
  - ・「湾を、海辺を『里海』『里海』と強調する意味がどこにあるのか」
  - ・「里山の形成が非常に大事だというのは一般の国民にも分かりやすいと思っていますけれども、一般国民が「里海」という言葉に今現在なじみがあるのか」
  - ・「海岸の環境整備については相当国民の理解を得られる」が、なぜに「里海」？
- 「『里海』という言葉への警告」（向井宏：海の生き物を守る会）
  - ・シンポ「『周防の生命圏』から日本の里海を考える」、08年7月、山口県
  - 「『里海』と称して人手を入れることは環境を悪化させることでしかないので、

私は海に親しむ海岸を作る—みんなが考えているような『里海』を作るには自然の海岸を守ること、これが一番大事だと思います」

### 1-3 本発表の材料とねらい

- 柳哲雄氏の「里海」
  - ・プロフィール＝九州大学教授・理学博士、専攻は沿岸海洋学  
沿岸域の物質輸送に関与する物理・化学・生物過程の研究に従事
  - ・なぜとりあげるのか  
里海の提唱者「90年代後半に『里海』という概念を思いついた」(柳 2006:95)
  - ・資料＝柳哲雄 (2006) 『里海論』 恒星社厚生閣
- 中島満氏の「里海」
  - ・プロフィール＝水産業界紙の記者・編集者を経て、現在フリーライター  
「まな出版企画」代表→雑誌『季刊 里海』、『海の守り人論』(1,2) 等発刊  
海と人との関わり、特に漁業権とその地域実態に関心を寄せ取材を続ける
  - ・なぜとりあげるのか  
「里海」を社会系にどう引きつけていくのか様々な示唆
  - ・資料＝「『里海』って何だろう？——沿岸域の利用とローカルルールの活用」  
(『水産振興』第 487 号、2008 年 7 月) をはじめとする中島氏の論稿および  
インタビュー (2009 年 2 月 13 日：東京)

⇒ <ねらい> 「里海」という言葉をどう理解し、どうとらえていけばいいのか？

## 2. 柳哲雄氏の「里海」

### 2-1 柳氏の定義

- 「里海」とは  
「人手が加わることによって、生産性と生物多様性が高くなった海」(柳 2006:2)
- 定義への疑問⇒「人手を加える」とは？
  - ・新たな「開発」の口実に使われないか？
  - ・無駄な公共事業の口実に使われないか？
  - ・これまでの人手の加え方、従来の施策に対する反省はないの？  
海が環境がなぜ疲弊してきたの？  
↓ 柳 (2006) を読み進めると……
- ・「人がいるからこそ保たれる豊かな自然がある」(柳 2006:29) ということ述べたうえで、人の手をどう加えるのか、どう豊かにするのかに走るのではなく……

### 2-2 里海づくりの基本

- 「里海を実現する基本は、沿岸海域で太く・長く・滑らかな物質循環をどう実現することに置かれなければならない」(柳 2006:31)
- 「人々がどの部分にどのような手を加えることが、太く・長く・滑らかな物質循環を保ち、沿岸海域の生態系を豊かにするのかを考えて」(柳 2006:30)

### 2-3 行為の規制・禁止則

- 「『里海』を実現するには、……沿岸海域でどのような事業なら許されるのか、どのような事業はしてはいけないのかなど、様々な局面における沿岸住民と沿岸

海域の関わり合い方を具体的に明らかにする必要がある」(柳 2006:30)

- 「指標生物の生息密度を保全するために、目標とされる水質や禁止されなければならない行為など様々な行動指針を具体的に定めていく必要がある」(柳 2006:33)
- 「『里海』を創造・維持するための環境倫理を確立するのみならず、富を生み出す『里海』に関係する人々が守らなければならない、様々な掟(義務)を整備していく必要がある」(柳 2006:91)

#### 2-4 「埋め立て」の禁止

- 「沿岸海域の埋め立て工事は原に禁止されるべきである」(柳 2006:32)
- 「干潟を埋め立てて、水田などの陸地にしてきた日本の国土利用法は、……食糧生産性の観点から検討し直す必要がある」(柳 2006:14)

#### 2-5 自然の機能修正・再生への留意事項

- 「埋め立てや直立護岸造成など、人の様々な行為により劣化した沿岸海域における自然の機能を修復し、再生することが、現在非常に重要になってきている」(柳 2006:51)  
としながらも……
- 「いくつかの海域では、藻場造成に名を借りた廃棄物処理が行われているが、このような工事は……決して許されることではない」(柳 2006:32)
- 「(人工砂浜・人口干潟の)事業を行う場合、将来にわたっての維持費用のことも当然考えておかねばならない。……環境を保全するための高い費用負担を将来の世代に押しつけることは賢明ではない」(柳 2006:33)
- 「干潟生態系を人間の都合の良いように造成・維持するということは容易ではない。……干潟の再生・創出に完全に成功した例はない。……海に関する私たちの知識はまだまだ十分ではない」(柳 2006:60)

#### 2-6 厳しい漁業資源管理規則の必要性

- 「沿岸海域を「里海」とするためにも、里海と同様、厳しい漁業資源管理規則とそれを維持していく適切な社会的仕組みが不可欠である」(柳 2006:80)
  - ・ 姫島<瀬戸内海の西端、大分県>の事例 (柳 2006:76-80)
  - ・ 三崎<愛媛県>の事例 (柳 2006:80-84)
  - ・ 東南アジア (柳 2006:85-86) の事例  
インドネシアの「『サシ』と呼ばれる資源管理法」を紹介。  
「サシには『休む』、『休漁する』、『禁漁する』という意味がある」  
  
「東南アジアにおける自然資源保護の制度は『里海』をつくり出すために大いに参考になる。私たちは日本沿岸海域を利用するための合理的な”サシ”を確立しなければならない」(柳 2006:86)

#### 2-7 「里海」という言葉の二つの出自

- 「里山」という文脈

・「生産性が高く、かつ自然生態系も豊かな里山のあり方を、海でも考えることはできないだろうか？すなわち『里海』をつくるのである」（柳 2006:29）

里山だけではなく

- 沿岸海域の再生という文脈 ←この点を押さえることは重要
  - ・「魚が採れなくなって汚れた沿岸海域を、どうすれば昔のようにきれいで豊かな海に再生できるか、という問題に関する議論をして、さらにいくつかの実践活動を行ってきた。そして、1990年代後半に、『里海』という概念を思いついた」（柳 2006:95）

### 3. 中島満氏の「里海」

#### 3-1 「里海」のイメージ

- 「人里近くにあって、その土地に住んでいる人の暮らしと密接に結びついている浜・海」を『みんな』で守り、利用していこう」とすること（中島 2009a:20）

#### 3-2 「里海」との出会い

- 「地域の人々と海のつながり」への注目
  - ・「再生ということは、自然環境や海生生物たちの現状や将来に、眼がいきがちですが、私の視点というのは、実は、どうしても海と関係を持つ人、とくに地域の人々が海という自然域とのつながりの深さをとりもどしたり、新たに創り出したりする、そういう方向に、どうしても入ってしまうのです」（web [季刊里海] 通信）
- 「里海」に注目するきっかけ
  - ・地域で起こった「里海」と名をつけた漁業者の新しい動き  
2004年3月 漁民のNPO法人「盤州里海の会」の発足(→中島 2009a:21 参照)  
地先の地域実態から「里海」へ  
↓そんな中島氏の目には……  
「里海の議論の中で地域というのが話されていない。漁村集落、漁村の実態が見えてこない」（中島 2009b）

#### 3-3 「里海」への問題意識

- 漁業の苦境・農村の疲弊
  - ・「なぜ今、里海なのかを考えてみましょう。今、漁業は苦境に立たされ、漁村は疲弊し地域は大きく変貌しました。黙っていても、海沿いの地域を代表する主体者は漁業者、漁協であると、国民だれもが納得できた時代が変わろうとしています」（中島 2008a:6-7）
- 「里海」が出てきた背景
  - ・「漁業者だけで地域を管理してきた時代がだんだん変化していった。そこに『里海』がでてきた」（中島 2009b）
    - ・「漁業・漁村の置かれている現実をなんとかしなければ、という危機意識が背景にある」（中島 2009a:20）
    - ・「漁村の力が弱くなっている時だからこそ、漁業者も率先して、みんなが納得ずくで地先の海、里海を利用できる仕組みを市民の人たちとつくっていく」（中島 2009a:21）

- 「里海」という言葉を用いて
    - ・地域の暮らしへの注目
      - 「地域実態を無視した計画は上滑りする」
      - 「きれいな海、豊かな海ではない。暮らしなんだ」（インタビュー）
    - ・「新しい海の利用の姿」「新しい海の共有」にむけた地域実態をさぐる
      - 「漁業という産業としての利用や、漁業者を中心に海沿いに住む人々の生活に結びついた利用に加えて、地域外や漁業者以外の人びとによる利用とが、漁業制度の枠組みを維持しながらも、『漁業』の定義を一步踏み越えた解釈をしなければならなくなるような新しい海の利用の姿が、各地で起こり始めているのではないか」（中島 2008a:8）
      - 参照 中島（2008a），中島（2009a）
      - 別紙「鳴浜の浜から『海をひらく』提案」
- ＝海を介した地域社会のありように着目

### 3-4 「海をひらく」とは

- 「高木委員会」（企業の参入自由化・規制緩和）路線とは異なる
  - ・「海をひらく、漁場を開放するというのは、全部開けっ放しにしてしまうと言う意味ではない。開くにもいろいろな意味がある。高木委員会は、経済的な障壁があるからそれを開くというものだ。この差を明確にしていかななくてはいけない」（インタビュー）
- 国益優先の海の開放とも異なる
  - ・「80年代になると、……大きな資本で海の開放をする方が漁業より国益になる、それには開発の邪魔になる漁業権を漁師のものだけでなく、みんなに開放せよという論議が出てきて……国益優先の海の開放論が叫ばれました。海を開放すると言っても向いている方向はさまざまで、今の市民の人たちが里海として自分たちにも海を開放してれと言っているのとは、大きく違うわけです」（中島 2009a:21）

↓中島氏が言う「海をひらく」とは……

- 海をめぐるローカル・ルールを基盤
  - ・「長い歴史の中で培われてきた海のルールを基に、主体はあくまで漁業者とその地域の人々が担うのですが、自主的に海の一部を開放し、新しい海の利用を考えていく」（中島 2009a :21）
  - ・「漁業権やローカルルールの機能や役割を活用し、漁場である海や浜の一部をうまく使い分けながら、海を漁師と『共同利用』できる仕組みに組み替えていけば、市民にも、漁業権がただ排他的なものなのではなく、持続可能な海を維持するための大事なルールなのだとということが理解してもらえははずです」（中島 2009a :22）
  - ・「広く自然域の利用に関して形成された地域ルールは、地域が変貌を遂げた現在も、実態を変えながら維持され、また、新しいルールも生まれてきます。そして、それらのルールを活かす方が、低いコストで、現実の管理利用の安定度が増すことに着目すべきではないでしょうか」（中島 2008b）
  - お台場海浜公園地先のノリづくり
    - ：漁業権放棄済み海面に誕生した里海（中島 2008a:42-48）
  - ・「慣習を復活させる。慣習を新たに作りあげる。地域と地域外の人たちの主体の譲りあい」（インタビュー）

・「どう開いていくのかは、これまでどう開いてきたのか、また逆にどう閉じてきたのか地域実態を踏まえることが大切」（インタビュー）



中島氏の「里海」＝漁業権、入会権、入浜権、コモンズとの深い結びつき

### 3-5 「里海」をつくる

- 留意点
  - ・「里山と里海の大きな違い」（中島 2009a:20）
  - ・「目に見えない、わかりにくい、里海づくりをするとき、慣習的な利用ルール、漁業権の地域実態を忘れてはならない」（インタビュー）
- 壁と醍醐味
  - ・「主体の数の問題ではない。初めは少数だ。漁村地区の特徴は全員一致のルールだ。これをクリアしていく。少数者が発言して全員一致のルールを築く。里海をつくっていくとき、みんなここをクリアしていつている。地域の閉鎖性を克服すると、その地域はとて強いものになる」（中島 2009b）
- 地域づくり
  - ・「地域ルールの形成は、地域の閉鎖性を克服すること。地域がとて強くなる。試行錯誤する価値は大いにある」（インタビュー）
  - ・「漁場の開放、開くことは新しい地域を作り出すもの」（インタビュー）
  - ・「地域力が里海づくりの実態をなしている」  
→里海をうみだすとは「海（沿岸域）のまちづくり」

## 4 まとめ—二つの里海論を交差させ、社会系グループに引きつけながら

### 4-1 柳氏の「里海」論をどう受けとめるのか

- 「里海」づくりとは
    - ・「人が手を入れながら太く・長く・滑らかな物質循環を実現し、海の生産性と生物多様性を高めていくこと
- 見落とされがちだが……
- 忘れてはならないポイント
    - ・「人手を加える」にあたって禁止則、行為の規制が多分に含まれている  
→「里海」の政策化・政策／実践分析・実践に向けた留意点
    - ・汚れた沿岸海域の再生の研究・実践の延長線上に柳氏の「里海」はある
  - 「人手を加える」とは？理論化の必要性（磯部作氏からの問題提起）
    - ・『「人手を加えることによって」、『豊かで美しい海域を創る』というこれは、わたしももっともだと思います。しかし……里海を誰がやるのかというとき、大企業などが儲かるということで、利潤追求目的で入ると重大な問題になると思っっているわけです。……『人手を加える』ということ、もう少し理論化していく必要があるのではないか」（08年11月伊勢湾再生研究プロジェクト・社会系グループの公開研究会）

#### 4-2 中島氏の「里海」をどう受けとめるのか

- 中島氏が強調するもの
  - ・地域実態への注目←「行政の政策とは必ずしも連動しない」(インタビュー)
  - ・「地域で育まれてきた個としての里海」(秋道智彌)  
「里という語の心地よい響きだけでこのまま突っ走れるかどうか、不安がよぎる。里海という共同幻想についていま一度考えてみる必要があるようだ。なぜなら、モデルとなる里海などはじつのところない。あるのはそれぞれの地域で育まれてきた個としての里海なのだ」(『Ship & Ocean Newsletter』185号)
  - ・ローカル・ルールへの注目  
過去の慣習の「掘起こし」、現在に慣習はどう活着ているのか、変わっているのか新たな慣習づくり  
→「人手を加える」ときの禁止則、行為の規制をどう築くのか、一つの示唆  
↓  
(課題) 伊勢湾をとりまく地域実態の把握  
コモンズ、入会権、入浜権、漁業権の理解
- 「里海」づくりとは
  - ・地域づくり、海のまちづくり
  - ・物質循環(生態系)に着目した柳氏の「里海」論になぞられるなら……
  - ・海をめぐる地域社会の循環(地域社会環境)に着目したのが中島氏  
→物質循環(生態系)と共に、地域社会の循環(社会環境)にも注目して「里海」をとらえる必要がある

#### <主な参考資料>

(文献)

中島満(2008a)『『里海』って何だろう?—沿岸域の利用とローカルルールの活用』

『水産振興』487号

中島満(2008b)「里海」って何だろう?—生業と暮らしを育む里海を考える視点」(『Ship & Ocean Newsletter』185号 所収)

中島満(2009a)「新しい海の共有—『里海』づくりに向けて」(『グラフィケーション』160号、20-22頁 所収)

柳哲雄(2006)『里海論』恒星社厚生閣

(講演)

中島満(2009b)講演「いまなぜ『里海』が登場してきたのか」2月13日、漁村研究会、東京・神田

(インタビュー)

中島満氏へのインタビュー、2009年2月13日、東京・神田にて